日本名家经典文库
精装插图版

宫泽贤治童话悦读选集

日文全本

宫泽贤治

[日] 宫泽贤治 著

世界图书出版公司

宫泽贤治童话悦读选集

日文全本

[日] 宫泽贤治 著

世界图书出版公司
上海 · 西安 · 北京 · 广州

图书在版编目(CIP)数据

宫泽贤治童话悦读选集：日文 /（日）宫泽贤治著. —上海：上海世界图书出版公司，2017.6
（日本名家经典文库）
ISBN 978-7-5192-2589-6

Ⅰ.①宫… Ⅱ.①宫… Ⅲ.①Ⅲ.①日语-语言读物②童话-作品集-日本-现代 Ⅳ.①H369.4:I

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第066306号

书　　名	宫泽贤治童话悦读选集（日文全本）
	Gongze Xianzhi Tonghua Yuedu Xuanji (Riwen Quanben)
著　　者	[日] 宫泽贤治
责任编辑	苏　靖
封面设计	高家鋆
插　　画	丁天天
出版发行	上海世界图书出版公司
地　　址	上海市广中路88号9－10楼
邮　　编	200083
网　　址	http://www.wpcsh.com
经　　销	新华书店
印　　刷	杭州恒力通印务有限公司
开　　本	787mm×1092mm　1/32
印　　张	6.25
字　　数	130千字
版　　次	2017年6月第1版　　2017年6月第1次印刷
书　　号	ISBN 978-7-5192-2589-6 / H · 1391
定　　价	32.00元

版权所有　翻印必究

如发现印装质量问题，请与印刷厂联系
（质检科电话：0571-88914359）

出版说明

“日本名家经典文库”系列，是我们为国内广大日语学习爱好者精心策划和编辑的日语阅读丛书，也是今后重点打造的丛书品牌，旨在为各层次日语水平的读者提供原汁原味的语言学习素材。此次推出的作品来自夏目漱石、芥川龙之介、堀辰雄等文学名家以及宫泽贤治、小川未明两位童话作家，具体包括以下九个品种：《我是猫》《夏目漱石短篇小说选集》《芥川龙之介短篇小说选集》《起风了》《菜穗子》《堀辰雄短篇小说选集》《银河铁道之夜》《宫泽贤治童话悦读选集》《小川未明童话悦读选集》。选取的体裁广泛，以长篇、中短篇小说（尤其是具有日本文学特色的“私小说”）为主，亦收录了在日本耳熟能详且广泛传阅的童话作品。

策划之初，我们邀请了研究日语语言、日本文学的专家老师，精选足以代表日本文学的名家名作。所收录作品尽可能覆盖到作者创作的各个时期，以便让读者了解作家在不同时期的思想变迁以及当时的社会百态。也正是由于作品创作、发表的年代不同，部分作品中个别日语语句的

用词、表达形式等，与现代日语的习惯不尽一致。除了特别必要而进行技术性处理之外，一般不做统一修改或添加注释，以尊重原作者，保留原著风貌。

读日语原文，学地道日语，赏日本文学——这是我们推出这套丛书的初衷和希望。在阅读过程中，不仅能潜移默化地提升日语水平，还可以体味不同作者的文笔特色，加深对日本文学和日本社会的了解与感悟。后续还将出版更多久负盛名的文学大家作品，并会推出日汉对照系列，敬请期待。

“日文全本”以全日语形式呈现，内附日式插画。装帧上，我们邀请了工艺美院的设计专家倾力打造，采用了相对古典的日系风格。圆脊精装，便于翻阅和收藏。清新的封面色彩配上大气的黑色腰封，有着强烈的视觉冲击。置于书架上，便是一道赏心悦目的文学风景。

阅读过程中，有任何疑问或见解，欢迎关注我们的微信公众号并留言，届时会有各种精彩活动。以书会友，从阅读“日本名家经典文库”开始。

最后，祝各位阅读愉快！

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

序

わたしたちは、氷砂糖をほしいくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃(もも)いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗(らしゃ)や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものがすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹(にじ)や月あかりからもらってきたのです。

ほんとうに、かしわばやしの青い夕方を、ひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということを、わたくしはそのとおり書いたまでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりの幾(いく)きれかが、おしまい、あなたのすきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。

宮沢賢治

目　次

注文の多い料理店
1

猫の事務所
17

セロ弾きのゴーシュ
35

グスコーブドリの伝記
65

雪渡り
125

よだかの星
145

どんぐりと山猫
159

狼森と笊森、盗森
177

注文の多い料理店

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたとこを、こんなことを云いながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここらの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたっと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄(ものすご)いので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠(うな)って、それから泡(あわ)を吐(は)いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、二千四百円の損害だ。」と一人の紳士が、その犬の眼(ま)ぶたを、ちょっとかえしてみて言いました。

「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう戻(もど)ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし腹は空(す)いてきたし戻ろうとおもう。」

「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日(きのう)の宿屋で、山鳥を拾円(じゅうえん)も買って帰ればいい。」

「兎(うさぎ)もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこった。では帰ろうじゃないか。」

ところがどうも困ったことは、どっちへ行けば戻れる

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

のか、いっこうに見当がつかなくなっていました。

風がどうと吹(ふ)いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。さっきから横っ腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。ああ困ったなあ、何かたべたいなあ。」

「喰(た)べたいもんだなあ。」

二人の紳士は、ざわざわ鳴るすすきの中で、こんなことを云いました。

その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒(いっけん)の西洋造りの家がありました。

そして玄関(げんかん)には、

RESTAURANT

西洋料理店

WILDCAT HOUSE

山猫軒

という札がでていました。

「君、ちょうどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ。入ろうじゃないか。」

「おや、こんなとこにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう。」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか。」

「はいろうじゃないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ。」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸(せと)の煉瓦(れんが)で組んで、実に立派なもんです。

そして硝子(がらす)の開き戸がたって、そこに金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮(えんりょ)はありません。」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただでご馳走(ちそう)するんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

二人は戸を押(お)して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下(ろうか)になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥(ふと)ったお方や若いお方は、大歓迎(だいかんげい)いたします。」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

「ぼくらは両方兼ねてるから。」

ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗(ぬ)りの扉(と)がありました。

「どうも変な家(うち)だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください。」

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう。」

二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

「これはぜんたいどういうんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。

「うん、これはきっと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいと斯ういうことだ。」

「そうだろう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわきに鏡がかかって、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったのです。

扉には赤い字で、

「お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それからはきものの泥を落してください。」

と書いてありました。

「これはどうも尤(もっと)もだ。僕もさっき玄関で、山のなかだとおもって見くびったんだよ。」

「作法の厳しい家だ。きっとよほど偉(えら)い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけずって、靴(くつ)の泥を落しました。

そしたら、どうです？ ブラシを板の上に置くや否(いな)や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。

二人はびっくりして、互(たがい)によりそって、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。早く何か暖いものでもたべて、元気をつけて置かないと、もう途方(とほう)もないことになってしまうと、二人とも思ったのでした。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸(たま)をここへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持ってものを食うという法はない。」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ。」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に

置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」

「どうだ、とるか。」

「仕方ない、とろう。たしかによっぽどえらいひとなんだ。奥に来ているのは。」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。

扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、ことに尖ったものは、みんなここに置いてください。」

と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありました。鍵まで添えてあったのです。

「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気のものはあぶない。ことに尖ったものはあぶないと斯う云うんだろう。」

「そうだろう。して見ると勘定は帰りにここで払うのだろうか。」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co